



タケノコどこだ 立川小学校タケノコ掘り体験

春の日差しが暖かな3月4日、立川小学校（日野和博校長・児童48人）は廣見光幸さんの竹林で、恒例のタケノコ掘り体験を行いました。この時期のタケノコは、地上に出ていないため探しにくい「早掘りタケノコ」。子どもたちはタケノコを見つけるたびに歓声を上げ、慎重に掘り出していました。廣見さんは「子どもたちが喜んでくれてうれしい。来年も来てほしい」と話しました。



ふるさとの美しい風景を継承するために 「景観まちづくり推進フォーラム」を開催

「景観まちづくりフォーラム」が3月7日、内子自治センターで開かれ、積極的に景観保全活動に取り組む団体として、泉谷棚田を守る会（上岡満榮会長）と池田自治区（中岡徳一重区長）に景観まちづくり賞が贈られました。

また京都府立大学宗田好史教授が、京都市の町家再生を例に、暮らしや文化の「美意識」を継承することの大切さや、景観形成の必要性などについて講演しました。



ふるさとの森を育てよう 神南山に苗木420本を植樹

第20回「内子の森づくり事業」（内子町、愛媛新聞社共催）が3月8日、神南山ふるさとの森公園で開かれました。ボーイスカウトの児童や住民ら約90人が参加し、桜や紅葉など17種類の苗木約420本を植えました。

参加者は、町内の樹木医尾花吉光さんから山の荒廃の話しや植栽の仕方について学んだ後、神南山からの見晴らしを楽しみながら、約3時間の作業を行いました。



内子町の魅力を都心に伝えたい 豊島区で「ものづくりメッセ」

内子手しごとの会（山本勝美会長）と内子町は3月6～8日、東京都豊島区池袋サンシャインシティで開かれた「第7回としまものづくりメッセ」に参加しました。4回目となる今回は、初めて設置した「紙すき体験コーナー」が人気を集め、家族連れなど多くの人でぎわいました。

売り切れる商品や、「彩あんどん」の商談があるなど、豊島区での知名度も上がっていきます。

内子でしか食べられない名物料理を開発 「内子うまいもん賞味会」

内子の食材を生かした新しい名物料理を県内外の人たちに広く知ってもらい、内子町の観光につなげようと「内子うまいもん賞味会」が2月19日、内子自治センターで開かれました。

町内の料飲組合と内子グリーンツーリズム協会（藤瀬利通会長）の会員を対象に、県内の料理人が所属する名工会（崎岡利光会長）を講師に招き料理学習会を開催するなど、25年8月から料理技術の向上と提供している料理の検証、新たな料理開発に取り組んでいました。

同賞味会には旅行業や報道関係者など65人が招待されました。内子豚やもち麦、小田川で取れた川魚など内子特産の食材を使った料理21品が並び、参加者はおいしそうに食べながら料理の感想を料理人と話していました。内山料飲組合の大野博組合長は「内子でしかとれない素晴らしい食材を使って、内子を代表する名物料理を作れたと思う。内子でしか食べられないこれらの料理を食べに来る人を増やすことで、観光客の人数と滞在時間を増やしていきたい」とあいさつしました。



1_会話と料理を楽しむ参加者 2_内子豚・原木椎茸・もち麦のロール 3_すでに商品化され好評な「あさぎり鍋」 4_あいさつをする大野博組合長

演劇を通して人に伝える力を磨いてほしい 石置小学校が俳優を招いての演劇指導

石置小学校（井上和義校長・児童12人）は劇団「無名塾」で俳優として活躍する本郷弦さんを招き2月21日、3回目の演劇指導を受けました。児童は同じ場面を何回も繰り返し、話し方・しぐさ・表情を変えることで、相手への伝わり方が変化することを学んでいました。井上校長は「演劇指導を受けて表現力をつけることで、誰とでも友達になれる人間になってほしい」と話しました。



楽しい演劇指導に笑顔を見せる子どもたち

町内の企業が開発力や加工技術などをPR 「うちこ元気アップフェア」

地元企業の開発力や技術力を知ってほしいと内子町商工会工業部会（大森秀樹部長）は3月2日、まちの駅Nanzeで「うちこ元気アップフェア」を初めて開きました。

参加した19事業所は、じゃばら石けんの無料提供やアルミニウム製のこまの販売、オリジナル缶詰の製造体験など、工夫を凝らしてイベントに参加。来場者との交流を図りながら、地元企業の良さを紹介していました。



ミニSLも登場し賑わう会場